

シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

第 1 回

第二部

いま、台湾の子どもの本は？

(要旨)

平成 22 年 6 月 26 日

講師：ショウ・イーブン

戦後、台湾における児童文学のはじまり【国語日報】

台湾で児童文学の動きが本格的に始まったのは戦後です。大きな役割を果たしたのが、「国語日報」という子ども新聞です。1947 年中国の北京で創刊された「国語小報」が翌年、台湾で「国語日報」として創刊されました。当時の中国では国民党と共産党の内戦が続いていて、国民党政府の敗色が強くなってくると同時に「国語小報」も国民党政府と共に台湾に移りました。台湾は終戦までの 50 年日本の統治下に置かれていたので、当時の台湾人の多くは標準語としての北京語を話せず、聞いても分からない状態でした。「国語日報」は国語の浸透と教育の普及を最大の目的とし、政府の国語教育政策にも全面的に協力しました。政治的理由の傍ら、貴重な児童文学オリジナル作品掲載の場としても活躍しました。例えば『林良爺爺的 700 字故事』。林良（リンリャン）は「国語日報」創立メンバーの一人で後に社長にもなり、台湾における児童文学の定義など多大な貢献を果たした人物です。『童話顛倒國』（童話の逆さまの国）は、ベテラン、若手を問わず様々な作家がテーマを決めて書いたアンソロジーです。

【漢声出版社】、【信誼基金出版社】と絵本

1980 年代初頭から老舗の漢声出版社が海外の優れた絵本作品を多く翻訳出版し、絵本が総合的芸術として台湾の人々にも知られるようになりました。補助的な位置付けだった絵に対する見方が変わり、子どもの視点を取り入れ、子どものことを考えた作品作りが始まりました。

80 年代に入り信誼基金出版社が台湾最初の絵本専門の出版社となります。最初から幼児教育の一環としての絵本文化を台湾で広めてきました。そういう意味でも保護者や幼稚園の先生方への影響力はかなり大きいです。信誼幼児文学奨という絵本賞を創設することで、台湾人絵本作家の育成にも力を入れています。例えば地方に密着したような作品作りの『紅龜紅』という台湾語の童謡集。幻想的でちょっと力の抜けたような画風の『假装是魚』（さかなのふりを）。両者を融合したのが、例えば『劍獅出巡』で、台南という古都で古い家の門に魔よけとして飾

られる、剣獅という口に剣をくわえた獅子の像がコミカルに描かれ、人気を得ました。

変化し続ける絵本のかたち

絵本作りや本の形にも変化が見られます。例えば、『Guji-Guji』という絵本はアメリカでも出版され、発売から3か月間で5万冊の売り上げを記録したそうです。このように海外へ広めることにも力を入れています。直接の購買層である保護者受けを良くするために、朗読CDや英訳小冊子などを同封することにより普及を図る一方、昔の名作の復刻出版もされています。例えば、『頼馬圖畫書』。頼馬(ライマー)は、80年代後半から今でも人気の高い絵本作家で、特に人気の高かった5作をスペシャルボックスとして売り出しています。『ドゥードゥードゥー(「口へんに都」を三つ並べる)』という白黒の絵本は、20年ほど前のベテラン絵本作家の曹俊彦(ツァウジュンイエン)の作品で、新たに復刻出版されて評判を得ています。

戒厳令解除と子どもの読み物

絵本が活況の中、読み物はどうかという、台湾では戦後長い間戒厳令が敷かれ、海外はもとより国内の言論の自由や情報などが厳しく制限されていました。1987年の戒厳令解除後は国内の言論が自由になり、海外からの良い作品はもちろん、国内でも意欲作がどんどん出始めました。児童書にも台湾の子どものためにと考える作家が現れ始め、特に元作詞家の李潼(リトウ)の、ときにファンタジーやリアリズム、SF系などの手法を多用しながら、台湾の自然風土や先住民族の歴史に素材を求めた作品は評判が高く、今でも各社から新装版が出続けています。

多様化する子どもの読み物

台湾の子どもの読み物の大きな特徴の一つは、作家の多くが現役の教員で多くは小学校の先生だということです。そのためか子どもにかかわる日常的なテーマがいち早く取り入れられます。最近では、90年代以降に急増した外国人の親とその子どもを描いた作品が目立ちます。言葉や文化が異なる環境の中で生まれ育った子どものお話が多く書かれています。

一方、台湾の子どもの間ではミステリーもの、探偵ものの人気が高いです。子どもの日常的なドタバタ劇や中国の古典と台湾の昔話をベースにしたエンターテインメント系の作品も根強い支持を得ています。例えば『神仙也瘋狂』(神様だってクレイジーになるさ)では、孫悟空がマイクを握りしめて、後ろに西王母が格好つけていたりします。また、お化けが登場する作品は子ども間で人気があります。従来にないユニークなイラストが物語を更に盛り上げています。例えば『鯉魚變』や『葉限』(中国のシンデレラを元にした再話)などです。

科学や自然環境に関する学習読み物は知識を得ていく快感があるので好まれます。日本の青い鳥文庫やポプラ文庫などが女の子(特に小学生)に読まれることを受け、台湾の児童書で

も漫画風のイラストを取り入れたりしています。

YAの世界では

ゼロ年代に入ってから、オンラインゲームの世界観をバックボーンにした作品が多く見られます。オンラインゲームの世界のルーツがファンタジーにまでさかのぼれることを読者、作家は必ずしも知っているわけではありません。しかし、台湾では山田風太郎などのちょっと怪奇な世界を描いた武侠小説というものが長く読まれていて、それがオンラインゲームのための素地をある程度整えてくれたことは考えられます。武侠小説を今風にアレンジしたものが結構あり、冒険物語なども広く中高生を中心に読まれています。

網路小説いろいろ

インターネットがかなり早い時期から完備されていることもあり、台湾ではインターネット小説が「網路(ワンルー)文学」と言われ、人気です。ネット小説が刊行されるのとはほぼ同時期に、大量翻訳されるようになった日本のライトノベルも、読者や作家に多少の影響を与えたのでしょう。台湾では図書館の代わりに貸本屋が繁盛しています。これらのネット小説は珍しく書店のみならずコンビニでも販売されているので、多くの売り上げ部数を誇っています。

最新流行事情

最新の流行の傾向としては、盗掘文と穿越文の人気があります。盗掘文とは、墳墓盗掘者の冒険物語です。穿越文というのは、主人公がタイムトラベラーの、多くの場合恋愛小説です。

正統派の目覚め

李潼の没後、しばらく台湾のYAは低迷し続けたと言われます。近年ようやく青少年に読まれるYA作品が再び現れてきました。思春期特有のもどかしさと焦燥感、そして切なさをエネルギーギッシュに描いています。ネット小説とは全然違う世界がここにはあります。

台北の書店

台湾の書店の児童書コーナーは広々としていて、その中でも絵本が大きなスペースを占めています。日本や欧米の小説や読み物もどんどん翻訳されてきていますが、児童書のコーナーではなくファンタジーや推理小説のコーナーなどに置かれていたりするので、まだ台湾では児童文学という認識が児童文学関係者の中で開拓の余地があるのではないかと思います。

台湾の児童文学業界が刻々と短時間の中で激しく変化していくさまを少しでもお伝えできれば幸いです。ありがとうございました。